

醤油のグローバル化 —オーストラリアの場合—

島本みどり

目次

はじめに

1. オーストラリアの歴史概略
 - 1) 入植からゴールド・ラッシュまで
 - 2) 経済
2. ゴールド・ラッシュの到来
 - 1) 移民者の来豪
 - 2) 中国人の来豪
 - 3) 金の採掘—方法と産出量
 - 4) ゴールド・ラッシュの政治・経済—規制
3. ゴールド・フィールドでの中国人の生活
 - 1) パララットのテーマ・パーク「ソブリン・ヒル」
 - 2) ベンディゴの「Golden Dragon Museum」
 - 3) ケアンズ
4. オーストラリアの醤油事情
 - 1) ケアンズの場合
〈スーパー・マーケットの醤油〉
〈醤油を使う人々〉
〈シェフ〉
 - 2) メルボルン・シドニーの場合

むすび

はじめに

オーストラリアの醤油事情の調査に先立って、2002年夏、米国における醤油のグローバル化をキッコーマンを中心に見てきた。アメリカにはキッコーマンの醤油工場がウィスコンシンとカルフォルニアにある。両工場合わせて10万KLの生産を誇り、その生産量は、日本にお

けるキッコーマンの大工場である、高砂工場の生産量と肩を並べる。キッコーマンが、アメリカの醤油のシェア・トップを勝ち取ったのは、ここ数年のことである。それ以前も現在も他の醤油メーカーの醤油との競合関係にある。競合する醤油は、中国の醤油でそれ以前にアメリカにもたらされたものらしい。アメリカでは中華料理のレストランが多く、料理には醤油が用いられていたと思われる。しかしアメリカにいつ、どこから、醤油が入ってきたかを、醤油をテーマに研究した例を知らない。

オーストラリアの醤油調査を思い立ったのは、アメリカ同様肉の消費の多い国であるから、調味料として醤油も多く使われているに違いないと考えたからである。キッコーマンの『キッコーマン株式会社80年史』(2002年)によると、シンガポール工場の醤油がオーストラリアへ輸出されているとある。そこで、2003年夏ケアンズ、2004年夏にはメルボルン・シドニーを調査旅行した。この調査が、「アメリカの醤油事情の調査でたどり得なかった事柄を解き明かす示唆を与えるかもしれない」というわずかな期待もあった。世界の出来事は何が、どこで、起こり、関係があるのか、関係なく存在するのか、現地で調査して分かることが多いのである。

観光地ケアンズの調査訪問でまず驚いたの

は、醤油の種類の多いことであった。ボトルの中身が私たち日本人の言うところの醤油であるかどうかは、定かでないが、「soy sauce」とラベルの張られた醤油がスーパー・マーケットの棚に並び、オーストラリア製、台湾製、中国製、香港製、ベトナム製、そしてキックマンなどで、アメリカとは異なる醤油事情がうかがわれた。現地で得た資料など読み解くうち、19世紀後半に中国人がこの地に労働力として入っていること、日本人も入っていることが分かった。また、オーストラリアがイギリスの植民地として開発された時期、ケアンズ北方の島々からも労働力として人々が移動していた。

しかしそれ以前に中国人が、オーストラリアに大挙して入っていった時期があった。米国でも起こったゴールド・ラッシュは、多くの国の人々を惹きつけたが、オーストラリアではゴールド・ラッシュは米国より長期に続き、オーストラリアへの影響は、非常に大きなものがあった。ゴールド・ラッシュ自身は、オーストラリアのみならず世界の経済に影響を与えた。産出された金は、金本位制を可能にし、イギリス、アメリカによる世界経済支配が高まったといわれる。その意味で金の発見は、世界の経済を新たな道へ進ませ、発展させるきっかけとなる世界的な大事件であった。ゴールド・ラッシュで金鉱地にやって来た人々は、オーストラリアにすでにいた人々、ヨーロッパ人、アメリカ人そして中国人であった。金採掘のために、ビクトリア、ニュー・サウス・ウェールズ（以降N.S.W）へやって来た人々は、金を掘って金（かね）を儲け、母国へ帰っていったと単純に思うべきではない。何年もその地に滞在して金を掘るということは、そこで生活を送るということである。筆者は、この時期にオーストラリアで醤油が使われ始めたのではと考えている。残念ながら、直接それを証明するような資料に

めぐり合うことは出来なかった。しかし彼らの生活がどのようなものであったか、想像のみでない姿を描くことはできる。それによって中国人によってオーストラリアに醤油がもたらされたと考えられる理由を見出すことは出来る。

この小論では、オーストラリアの醤油事情と醤油のグローバル化を、醤油がもたらされた歴史的状况、植民地建設と植民地経済、ゴールド・ラッシュを経て世界の経済のなかに組み入れられオーストラリアが発展していく状況を軸に見ていきたい。

1. オーストラリアの歴史概略

1) 入植からゴールド・ラッシュまで

オーストラリアの歴史は、新しい。ヨーロッパで16世紀から始まった大航海時代は、それを契機に人々が世界的に活動を始める時代で、18C.後半に至ると世界先進諸国は、日常的に航海活動をしていたといえる。オーストラリアはイギリスとフランスの争いの後、Cook船長によって発見され、イギリスの植民地として領有が宣言された。1788年には、イギリスはアメリカの独立によって行き場を失ったイギリスの囚人たちをオーストラリアに送り込み、彼らは町の建設に従事した。現在、シドニーのロック地域といわれる海に面した地域は、その当時の建物が歴史的建造物として保存されている。

しかし囚人のみが来豪したわけではなく、初代総督アーサー・フィリップは、750人の囚人と250人の入植者を統率していた。1788～1830年の間に60,800人の囚人が送り込まれ、自由移民13,205人が上陸した。1836年当時、植民地のヨーロッパ人人口は、77,096人であった（28「Trade Wall」シドニー博物館）。囚人移送は1860年まで続き、総計して179,490人、他方自由移民は657,636人がオーストラリアに植民した。そのうち補助移民といって政府の援

助によって移民する人々が、357,904人（自由移民の55.5%）いた [14, p.73]。人々はヨーロッパの政治・経済・社会情勢の変動で、また冷害による凶作に押し出されるように移民してきた。あるいは産業革命という社会構造の激変期に社会で行き場を失った人々や、社会で受け入れられなく犯罪を犯した人々がやってきた。両者ともその時代の影響を最も受けていた人々といえる。しかし自己負担で移民する自由移民も急速に増え、多様な経歴を持つこれらの人々が社会に加わることで、植民地の社会基盤が整っていったといえる。

人々の上陸したシドニーでは、植民者は原住民のアボリジニと摩擦を起こしながら支配地を拡大していった。1788年以後N.S.Wが生まれ、1829年には西オーストラリアが生まれ、1836年にはオーストラリア南部に多くのドイツ人が入植し、南オーストラリアが生まれる。1851年にはN.S.Wからビクトリアが分離し、1859年にはクイーンズ・ランド（以降Q.L.D）が分離している。1851年にゴールド・ラッシュが起きる前、大陸は西オーストラリア、南オーストラリア、N.S.Wから成っていた。

2) 経済

人々が上陸した地は植民地であったが、住む家もなく、社会基盤としての道路も、浄下水の設備もなかった。イギリスの建築家によって都市計画がされ、町の区画、建物の配置等きめられ、イギリスであふれた囚人たちがこの建設に従事した。オーストラリアへ送られた人々は、年齢構成としては16歳から35歳が最も多く、識字率はイギリス本国の平均より高く、都市的な産業に従事する熟練労働者も多かったといわれる [14, p.74]。植民地政府当局は配給局を設置し、物資の購入にあたり、労働する囚人たちをまかした。初期のオーストラリア植民地

はこの配給局を中心とした経済であった。少数の自由移民たちが、納入する物資を生産し、輸入し、配給局と取引した。

1792年には、アメリカの商船が来航、後にアザラシ漁や捕鯨の船がオーストラリア南岸から西オーストラリア一帯で活動するようになった。その活動にはオーストラリア、タスマニアの船も加わり、補給基地が点在するようになった。必要な物資を補給するため新たな生産活動が起こり、海産物の加工等の産業が起こった。この外部との経済取引は、まだ人口の少なかったオーストラリアにとって産業構造をかえるに十分であった。

「Trade Wall」（シドニー博物館の展示ガイドリーフレット）は、1830年代のオーストラリア・シドニーへ輸入された品目一覧で、その当時のオーストラリアの交易状況を現わしており、興味深い。それによると当初喜望峰とインドから生活必需品が送られてきたが、1790年代半ばから驚くほどの贅沢品が含まれていた。輸入についてはその時々政治情勢に左右されていた。またインドとの交易はイギリス東インド会社によって厳しく制限された。会社はインドの港から船積みされる中国からの品物を必要としたからである。

1836年、大小あわせて585隻の船がシドニー港にはいった。自由移民船（25）、囚人船（19）、商船—イギリス（62）、スコットランド（5）、喜望峰（13）、モーリシャス（12）、インド（7）、中国（4）、バタビア（4）、北アメリカ（5）など。南洋水産会社（25）、ニュージーランドから材木、太平洋諸島からは日用品、タスマニアから馬鈴薯、小麦、りんごなど。我々のテーマで関心のある中国を取り上げると、絹、陶器、家具、干し魚、砂糖、茶—この説明には日本からの緑茶が入っている—が、輸入品目になっている。総量で687,655lbsにのぼる茶の

貿易では、オーストラリアの通貨を激減させている。

ゴールド・ラッシュ前にも、すでに何らかの中国との交流があったことは、この交易や、中国船が4隻来豪していることでもわかる。交易だけでなく、中国人は1830年代後半からオーストラリアに入っていた。インド人、中国人が安価な年季契約労働者としてスクオッターらによって導入されている。中国へ最初にゴールド・ラッシュを伝えたのは、植民地建設に加わった中国人大工であった [14, p.107]。

このように交易や人の流入が起こっていた時代、イギリスからの自由移民も増えていた。彼らは旅費を自分でまかなう中産階層・富裕層であった。植民地当局の制限にもかかわらず、移民者たちは領土拡大の勢いをとめなかった。1810年、シドニーの西方、現在観光地となっているブルー・マウンティンズ背後に牧畜に適した地を発見すると入植し、羊を飼い始めた。羊毛産業が盛んになり、牧羊を中心に関連産業が育っていく。これらの人々はオーストラリアでスクオッターと呼ばれる新興の富裕勢力となっていく。イギリスでは1830年にオーストラリア産羊毛は全羊毛輸入の8%を占めていたが、1850年には47%に増えている [14, p.64]。オーストラリアの輸入は、「大ブリテンー世界最大の輸出国から輸出される商品の15%を買い求め、1846年から53年（51年からゴールド・ラッシュ始まる）の間に271%増えた。」 [3, p4] というから、人口増による消費の伸びだけでない、新産業による物品の購入が急速に増えたと思われる。オーストラリアは、植民地の配給局を中心とする経済から、第一次産業の牧畜産業で富裕層を生み出す段階へと変わっていったと思われる。

新移民が増え、新産業創出の力によってオーストラリアが世界の経済システムへ取り込まれ

ていくことが見て取れる。新しい交易が始まり、新しい産業が起こるにつれ、外部と内部の相互作用のうちにオーストラリア自身の経済が世界の経済構造へ繰り込まれていったといえよう。この成長によって社会自身に変化が起こり、ゴールド・ラッシュが起こる前には、富裕層が生まれ、階層社会になっていく。しかしゴールド・ラッシュは、さらに大きな経済的政治的な発展をオーストラリアに促し、独立した国への道を歩ませることになる。

2. ゴールド・ラッシュの到来

1) 移民者の来豪

1851年、N.S.Wで金が発見され、ビクトリアのBallarat（以降バララット）、Bendigo（以降ベンディゴ）などでも発見されると、オーストラリアの都市の男たち、そしてヨーロッパの人々が、大挙して金鉱地へやって来た。少し遅れて中国人も入ってきた。ゴールド・ラッシュは、すでにアメリカのサンフランシスコ近郊で起こり、盛期を過ぎていた。そこで働いていた一部アメリカ人も、ビクトリア、N.S.Wを目指してやってきた。

ビクトリアでは金の鉱脈の分布は広範に渡り、量も多かったため、人々が殺到した。ビクトリアで金の発見された原野は36ヶ所で、産出力の最も多かったのはバララットとベンディゴであった。Weston Bateによる『ビクトリアのゴールド・ラッシュ』によると、1851年から1861年の間にビクトリアでは人口が77,345人から540,322人へと増えた。外国から来た人々は293,313人、正確な統計数字はないが、オーストラリア内では169,658人が移動したといわれる。しかし来豪して金を掘り、金儲けのうえ帰国する人々もいた。イギリス系（アイリッシュ、スコティッシュ、ウェールズ）の人々は多くの場合残り、ヨーロッパ系と中国人－外国人の

45,410人のうち、18,439人が残った、といわれる。イギリス系の優勢は変わらなかった。[3、p.27]

Bateの著作に紹介された1871年の金鉱地人口を示す表（N.S.Wとビクトリアの1871年の人口調査による。500人以上の人口の町で、金採掘の働き場所で働く40人以上の金鉱夫のいる町の人口）がある。それによるとベンディゴでは28,577人、バララットでは47,701人、ビクトリア全体では金鉱地に145,978人がいた。N.S.Wの7ヶ所の金鉱地を集計すると7,624名である [3、p56]。この時期はすでにゴールド・ラッシュは金産出の鉱業に変化しており、町は他の産業によっても支えられていた。

2) 中国人の来豪

中国人は、金の発見から少し遅れ、1854年に初めて、メルボルンの港に2,000人がやって来た。多くは広東省Toi Shan、San Wai、Hoy Ping、Yung Pingの出身者であった。彼らは、「自分で旅費をまかなうヨーロッパの移民と違って、多くの場合、金持ちの中国人—銀行家・村の年寄り・金貸しに費用をまかなわれ、固定賃金で仕事にやって来た。農民が多かった。」[1、p4] という。「中国人と法」では、「中国人移民者の3分の1近くが、自費で旅費をまかなう人たちだった。それらの人々は職人、店主、商人だった」[18、p.17] と述べる。中国人の多くは独身で、借金からまず開放されるために働き、その後一定の費用を頭に納めて中国にいる家族や自分のために働いた。

彼らの乗った船は初めはメルボルンへ、後に規制が強まると南オーストラリアのアデレード、ローブへ上陸し、迂回してビクトリアの金鉱地へ入った。ローブからベンディゴまで800Km、徒歩で25日を要した。荒野の旅でアボリジニによる襲撃もあり、水の確保、食料の確保など、

現地に到着するまでに様々な解決しなければならない問題があった。残されている写真によると、明らかに中国人と分かる一群の人々が、荷物とともに折り重なるように馬車に詰め込まれ、積み上げられて現地に向かっている。別の写真によると辮髪に円錐様のハットをかぶり、長い棹の先に荷物をくくりつけ、棹を肩に担いだ人々が、長い一列の列を連ねて荒野を歩いている。中国人が金鉱地へ向かう姿である。

中国人のみの来豪者の集計は、ベンディゴにある金龍博物館（Golden Dragon Museum）の展示のなかに発見できる。その展示には、オーストラリアに留まった人々の離合を含めた数字が集計されている。それによると1854年には2,155人、1861年に22,833人、1881年には13,279人、1901年は6,667人の中国人が金鉱地にいた。この記録は20年間隔である。「中国人と法」によると1856から1858年に南オーストラリアのローブに上陸した中国人は16,500人、1857年には23,623人の中国人がビクトリアにおり、全体的には25,425人いた [18、p.23]。「ベンディゴと中国人のJoss House」によると「一時は、植民地における鉱業人口の成人男性の20%を占めた」という記述も見られる [17、p8]。いずれにしても最盛期は2万4,5000人の中国人がオーストラリアに滞在したようである。

3) 金の採掘—その方法、産出量

藤川の説明によると「金鉱床は、地質時代に金を含んでいた大分水嶺山脈から水流によって流れ出て、勾配のなくなる平地に堆積して出来たもの」で「この金鉱床は、地表面近くに存在していたため、スコップのような簡便な道具で採掘できた」。もう一つのやり方は、「50mほどの縦坑を掘り、それから水平方向に横坑を掘る」[15、p.85] 方法である。掻きだされた土は水で洗い出され、金が選別された。浅掘り

(alluvial digging) といわれるこの採掘方法は、錫製の洗面器様の皿に土を入れ、水で洗ううち、金の中から発見されるという方法である。必要な装備は、スコップ、金選別器（洗面器）、そして水洗いのための水路である。この設備は、カリフォルニアで金採掘にあたった人々が設置した。ベンディゴでは水が少なく、工夫が必要だったが、バララットでは粘土質の土だったため、puddling技法が採用された。この技法とは、「金色を帯びた粘土が装備のタブのなかへ水とともに入れられ、鍬で割られ、馬に引かれて円を描いて回る機械で、飼葉桶の中の泥粘土がごしごし洗われた。」[3, p.11] という方法である。金採取のための方法はその地質、水利状況で異なった。地質の異なる、金を含む土の中から金を選ぶための技法は、それほど複雑でも高度でもなかったが、工夫の必要なものであった。後には膨大な土が残された。

その後、浅掘りから深いところでの採掘に移る。2年程で地表近くに現れた金が掘り尽くされると、深いところへ掘り進む必要があった。この採掘では浅掘りよりはるかに多くの金を掘り当てることになるが、この方法には技術と資金の両方が必要であった。資金は、海外（イギリス）からの投資、メルボルンからの投資、そして成功した地域の採金者も参加することで集められた。株式による会社の設立がなされた。技術については、地質学の発展が求められ、金の位置を突き止める技術、ポンプ水をかき出す技術、ドリルークォーツ岩石を掘り割る技術、爆発物の使用のための技術、換気の技術等研究された。バララットには鉱山学校が生まれ、鉱業で働く技術者はそこで訓練された。「ドイツ人たちは永住する傾向があったが、彼らの地質学技術を通して長期の影響をベンディゴのクォーツ鉱山会社に与えた」という [3, p.28]。

採金では、深く掘るにつれ、ナゲットと呼ば

れる大きな金の塊が発見されるようになる。このようにして産出された金の量は、バララットでは、1851～60年-4,262,000oz、1861～70年-5,000,000oz、計9,262,000ozであり、ベンディゴでは、1851～60年-4,521,000oz、1861～70年-2,128,000oz 計6,649,000ozであった [3, p.54]。これらの数値をメートル法に換算すると、ベンディゴでは206.8トン、バララットでは287.5トンで合計494.3トン、N.S.Wでは62.2トンである。他のゴールド・フィールドを合計すると622トンに及ぶという [14, p.93]。この量は世界の金産出の3分の1を占めた。オーストラリアからイギリスに送られた金によって、紙幣にまだ信用のなかった時代に金本位制を採用することを可能にし、イギリスおよびアメリカの交易は信用を増し、経済強者になっていく。

中国人は、では金原でどのように働いていたのか。オーストラリアの人々、ヨーロッパの人々は、当初金原野でまず浅掘りによる金採掘をした。中国人が訪れたとき、すでに大方の金は掘り尽くされていて、彼らは採掘場の横に積み上げられた金の採られた残り土を再び水洗いする作業を行なった。あるいは捨てられた浅いシャフトで働いた。見落とされた金がたまに見つかることを当てにして。このような方法でも金を発見することが出来た。「中国人と法」では、「見返りは多くないが着実だった」と記す [18, p.19]。同資料によると1857年中国広東に送られた金は205,464ozで、メートル法に換算すると、約6,390kgであった。

4) ゴールド・ラッシュの政治・経済規制

ゴールド・ラッシュが起こった時、植民地政府は歳費の獲得と採掘を監督するため、毎月30シリング、後に鉱夫の反対を受け入れる形で月10シリングの採掘許可料を課した。この額は、

金採掘は不確実な営為であったため不評であった。採掘中に許可証の抜き打ち検査をすることもあり、行き過ぎた管理に鉱夫たちの不満が高まった。採掘料にたいする意見申し立ての権利、政治の場へ代表を送り出す権利主張の機運が高まり、鉱夫たちは集会を開き示威行動をした。これを弾圧する当局側との衝突が起こり、鉱夫には死者が出た。1854年11月29日に起こったこの事件は、ユーリカ砦の反乱としてオーストラリア民主主義の原点と位置づけられ、語り継がれている。ゴールド・ラッシュのテーマ・パーク「ソブリン・ヒル」には、この問題のみ扱ったパンフレットがあり、「彼らは、ゴールド・フィールドを支配する規制に対して変化を望んだ」と説明している [23]。

中国人がゴールド・フィールドに入植すると、白人との容姿の違い、言語の違い、宗教・習慣の違い等、人種・文化的な違いに対する反感を白人から受ける。個人でやってきて国の出身地別に分かれて暮らし、個人単位で働く白人に比べ、中国人は、大集団でやってきて、頭に統率され、集団で効率よく働き、同じキャンプ地のテントやあばら家で共同で生活した。文化の違いに対しては、誤解のうえに白人は優越感を抱き、人種的には自分たちが優れていると考えていた。それらの点に加えて「中国人は金洗浄に必要な水を汚し、経済的にも、中国人が trailing といわれる採掘後の残土から金を掘ることに不満を持っていた。金が探し出せないとき、白人もその中に戻り、金を掘りだしたかった。白人は中国人が故国へ金を送ることにも不満を感じていた。」 [18, p.19~20] しかし、「Ballarat Chinese Heritage Trail」(22 リーフレット バララット) は「浅掘りでの中国人技術と水の使用技術は、鉱業発達における意義ある要因だった」とのべ、中国人が金採掘に何らかの貢献をしたと主張している。

しかしながら反目・敵対意識は、具体的な攻撃という行動となって現れた。1857年、ビクトリアの Buckland、1861年には N.S.W の Lambleng Flat、1877年には Q.L.D の Palmen、これらの地のみならず、他のところでも殺人に至るほどの襲撃、大挙して中国人キャンプの中国人を追い出す仕打ちが起こるようになった。当局は、この反目を受けて1855年には、暫定的に中国人に1ヶ月1ポンドの税を課し、中国人移民に対し入国制限を始めた。中国人に対し、一人10ポンドの入国税をかける、さらには乗船者の数を船の運搬能力の10トンにつき一人に限定した。この措置は1860年に法制化された [18, p.5~26]。

「中国人と法」は、現在閉められている Wedder Burn 裁判所から発見された1860年に遡る2冊の古い記録をもとにかかれた論文である。その記録内容は、多くは採掘に関すること、使用料と課税に関することである。その中に「中国人移民法」のもとに1859年に法制化された税と中国人の居住権のための料金についての記録がある。上記の居住権のための税についての中国人の嘆願記録も残っている。それによると「金を求めてゴールド・フィールドにやってくる事が出来て嬉しい。イギリス人が親切で、よい人だと聞いた。議院が1ヶ月1ポンドの税を課そうとしていると聞いて、どうしてよいか分からない。掘ることは大変難しく、生活していくことすら難しい。もし1ヶ月1ポンドの税を払えば食べることも出来ない。貧しい人たちから厳しい取立てがないように」 [18, p.24] という主旨の嘆願である。

しかし、法施行後、中国人の入国は急激に減り、中国へ帰る者も多くいた。残った人々は、町へ、あるいは N.S.W へいき、商売などに従事した。メルボルン、ベンディゴ、ピーチワース、その他の町に中国人街ができた。1881年にはメ

メルボルンに1,057人の中国人がおり、1891年には2倍の2,143人になっていた。1901年にはビクトリアには中国人が7,349人おり、メルボルンには2,200人がいた。多くの中国人はベンディゴへ移り、ベンディゴは中国人の遺産、文化の中心地となった。「中国人移民制限法」は、中国人が権利を持つのを妨げていたので、社会の中で孤立し、同化も難しかった。友人・親類を不法にオーストラリアへ呼び出し、店や工場のために新しい労働力を集めようとしたが、不成功に終わる場合が多かった。しかし彼らの社会は孤立のうちにも繁栄したのである [18, p.8]。

他方、オーストラリアへやって来た白人優越意識を強く持った中国人以外の人々は、旧勢力とともに国の方針として白豪主義を旗印としていく。1901年にオーストラリアがイギリス植民地から独立し、英連邦の一員として出発することになるとき、この方針は固まり1960年代末まで続くことになる。

3. ゴールド・フィールドでの中国人の生活

金採掘に関わるところのみ見ると、中国人が大変な辛苦のうえに暮らしていたように見える。各種著述をひも解くと、彼らの貧しさに触れているものがある。しかし彼らにも苦しいだけではない生活があった。バララットをテーマにしたテーマ・パーク「ソブリン・ヒル」、ベンディゴの中国人による「金龍博物館 (Golden Dragon Museum)」が彼らの生活を私たちに示してくれる。「金龍博物館」の他にもビーチワース、 Gumサンなどに中国博物館があり、ゴールド・ラッシュ時の彼らの生活が伺えるようになっている。ゴールド・ラッシュが少し遅れてきたQLDでも、ケアンズの町の後背地アサートン高原に中国人博物館がある。ゴールド・ラッシュ後にケアンズを経て行って行った高原で開拓をし、野菜栽培などの農業を営みながら生活し

た中国人の記録と展示である。ここでは、筆者が訪れたバララットとベンディゴの博物館を中心に、ケアンズについては残された資料・文献によって中国人の生活を描いてみたい。

1) バララットのテーマ・パーク「ソブリン・ヒル」

「ソブリン・ヒル」は、バララットのゴールド・ラッシュをテーマにしたテーマ・パークの名称である。イギリス系人、ヨーロッパ人、アメリカ人が中心の構成になっている。中国人については「Ballarat Chinese Heritage Trail」というバララットにおける中国人の残した跡をたどる道が整えられており、リーフレットも準備されている。その内容によると「バララットには、すでに1830年代に羊を追う中国人羊飼いが入っていた。ゴールド・ラッシュが起り、1857年には25,400人の中国人がビクトリアにいたが、バララットとその周辺に多くの中国人が集まり、鉱夫たちの3分の1は中国人であった」と記している。パークの中心部分をヨーロッパ系主流の町の再現に当てている中で、片隅にひっそりと中国人のテント村が作られている。

パークの入り口を入るとゴールド・ラッシュと「ソブリン・ヒル」を説明する展示館になっている。部屋の中央に「ソブリン・ヒル」を概観出来る模型があり、周りはゴールド・フィールドの様子を伝える写真がめぐらされている。次に進むと、「金が発見された..」という驚きの知らせが各家の戸口に告げられ、興奮が巻き起こっているのを家々、人物を配置して伝えている。状況から考えてメルボルンの町の話であろう。オーストラリアへ向かう船の中の様子も再現されている。家族連れも独り者もいる。他の一角には、装備を準備し、食料を備えてゴールド・フィールドへ行こうとする人物。そして別のコーナーには地面にへたり込んで座っている

中国人。パークに入るとメイン・ストリートをはさんで、パン屋、肉屋、食べ物屋、仕立て屋、レモネード店、中国料理店、バララット新聞のテント、郵便局、ホテル、鍛冶屋、金採掘工場、政府派遣キャンプ、中国人の保護官のテント、学校、中国寺院、教会、劇場、などなど。78にのぼる店や工場、修理店が立ち並んでいる。パークの道を実際に4頭立ての馬車が走って雰囲気盛り立てる。馬が金を選別する道具をぐるぐるまわりながら動かしている光景も見られる。

そのパドリング技法の選別器の横を入っていくと中国人のテント村がある。残された写真—初期のGolden Point Chinese Villageの写真—をもとに再現されているテント村は、大きく分けて寝泊りのテント、板製のあばら家—書記、漢方、雑貨の店—そして寺院から成っている。一つ一つのぞいて見ると、一つのテントは、持ち物は中国からのものが占める。他のテントにはベッドに毛布、ラーメン鉢のような容器が3、4個置かれている。「陳記順興雑貨舗」と表示のある店は板製のあばら家である。5坪ほどの店は二つに仕切られ、中は一方が「志在陶朱経営商業」という名の陶器店、もう一方が「和崇管飽開闢富源」という名の雑貨商である。陶器店では大中小の種々の器、どんぶり様の器、茶器、スープ入れ容器そして大きな蓋つき壺—これには字が書かれているが判読できない—が並んでいる。雑貨商の方は、竹製の蒸し器や籠、大きなブラッシュ、フライパン、種々の壺、何の用途か分からない木製の臼のようなもの、スコップもある。また関帝の像とおぼしき像、笹竹のような長い木製の細棒—明らかに宗教目的と思われる。次へ進むと「林記保康堂薬草店」で、中には相談に乗るためと思われる椅子とテーブルが置かれている。もう一つは書記の店である。書記は、文盲が多かった中国人のために

故国の家族・親類へ手紙を書いたり、届いた手紙を読んだりする、家族をつなぎ情報の交換を助けるための職業であった。

板葺きのあばら家を見て回ると台所に蒸籠、はし立て、壺、調味料をかき混ぜるためと思われる大小のすり鉢様の鉢とこね棒、調味料の小瓶2つ—中身の一つは醤油のような色をしている—がある。もう一つの家はしっかりした造りで、頭の家かもしれない。「ベンディゴにおける中国人の共同体—ユニークな歴史」[20、p.47]によると、「ビクトリアにやってきた中国人の殆どは、組織され、自己充足した組織のメンバーだった。彼らは詳細な決まりによって所属が決まっており、それによって適当な団体に割り当てられた。普通祖国中国の地域とその所属は繋がっていた。彼らはそれらの団体の頭を通して割り当てられた仕事をするために契約していた。そして各地方のクラン集団からなるキャンプで暮らしていた。」この小屋には、板張りの床、レンガ造りのくどには大きな中華鍋がかかり、木製の蒸し器がのっている。テーブルの上には広口のどんぶり、その他の器がのり、調味料の小瓶が並んでいる。テーブルの横の棚には糖とかかれた壺、醋とかかれた壺がある。その横には「程門歴代祖先之位」と書かれた小板がある。それほど広くない中国人キャンプ村には金採掘の傍ら食糧確保のために栽培した野菜畑にも出会う。

そして村のはずれには赤い関帝廟の建物があり、関帝が祭られている。中を十分に見ることが出来ないので、旅行者用のガイドの説明を借りると「祭壇の上に関帝の像があり、祭壇の脇の小さなテーブルには馬がおり、近くには剣がたてられている。祭壇の正面左には富の神Choi Bakの祭壇がある。参拝者が富紙幣をささげる区分があり、玄関神であるMun Goonの小さな祭壇がある。祭壇には、線香のための壺が置かれ、

供え物、お茶が供えられている。」[31p.25~29]メイン・ストリートのはずれにJohn Alloo's レストランがある。ここでは中国料理、ヨーロッパのスープ、シチュー、パイが出されていた。ヨーロッパ人、中国人共に訪れたとの説明がある[33、p69]。「バララット中国人遺産の道」(前出)によると遺産の道の一つとしてJhon Alloo's Restaurantの記述がある。中国人の名前にはAlの字がつけられたので、レストラン経営者は中国人であろう。

2) ベンディゴの「Golden Dragon Museum」 (金龍博物館)

金龍博物館では、二つの主要な展示物がある。一つは、ベンディゴのイースターの主演出し物である金色の龍であり、これが博物館の名前にもなっている。博物館はこの龍が、格納される場所である。博物館を訪れる人々は、真近にこの龍を見ることができる。そして他の展示物は、ゴールド・ラッシュ以降の中国人の生活文化を紹介することである。博物館は、100メートルに及ぶ龍を収めるためにドームになっており、館内に入ると龍が中2階で、長い身体をドームに沿って波打たせながら、顔を1階へ向けて鎮座している。イースターに出場する龍の行列は、ビクトリアのみならずオーストラリアで知られた一大ページェントであり、毎年50万人の人を集める。イースターのようなキリスト教の中心的な祝祭になぜ中国の龍が登場することになったのか。

龍の行列(くりだし)は中国の新年を祝う行事であった。ベンディゴでのイースターの祭りはベンディゴ病院と慈善保護施設のための基金を集めることを目的に、1871年に始まった。様々なスポーツ、ショウも行なわれて市民に楽しみを提供した。中国人コミュニティも参加することが求められ、彼らは寄付によって、龍を

製作するための基金をつくることを決めた[19、p.15]。「中国人の行列」に記されているように、貧しい中国人にとって費用のかかる龍と関連の品目を製作することは、経済的に大変負担であった。当初龍を繰り出すために年600ポンドが必要であった。しかし参加することは、価値ある慈善の目的のために共同体とともに働くチャンスであり、中国人がより広く共同体から尊敬を得る機会であったので龍の行列を行なった。中国人がオーストラリアの社会に受け入れられる一つの突破口として、彼らは中国の文化を最大限に生かした。中国人に対する反目は前節で述べた。ベンディゴが中国の文化センターとして位置づけられるのは、そのようにその地域ではオーストラリア人と中国人の融和がすすんだからといえる。「Dragon Procession」が掲載する写真によると龍の行列には、中国人のみならず、白人の大人、子供も参加している[25、p.9]。中国の龍はこのように知られるようになった。

中国人の生活を展示する博物館は、バララットで見たゴールド・フィールドのキャンプ村から何十年を経て、オーストラリアに根を下ろした中国人たちの暮し振りが展示の中心になっている。関帝の祭壇、精巧な刺繍の施された中国服、黄色の地に緑の龍の絵が描かれた大皿、中国美術のシンボル一覧、手の込んだ工芸品、柳ごうりと保存薬品、ゴールド・ラッシュ時の中国人の移動写真、ビクトリアの1854年以降の中国人流入マップ、金鉱地の風景、中国人経営のファンシー・ショップにオーストラリアの女性の訪れる絵写真。鉄製水差し、金鉱現場の模型など。一区画毎に当時の社会を映すコーナーがあり、中華公所、木製で精巧に細工されさまざまな意匠が浮き彫りされた銅版の張られた寝室。少し洋風化された部屋のしつらえに龍の文様の紅茶セットがテーブルに置かれた部屋。中

国人の職業をあらわすコーナーには洗濯屋、商人、中国の薬剤師（漢方）、事務員、小売業、中国レストラン経営者。当時から何十年を経て教育を受けるようになって先生になる人、医療関係の仕事につく人、初めて弁護士になった人などなど。中国人がオーストラリアに入るきっかけとなった歴史的出来事とそれに関係する展示物、生活感のあるものから美術品と呼ばれるような工芸品に至るまでの様々な展示物、やがて中国人社会が変化し知識人と言われる人々を輩出するまで、何十年間の中国人の生活を展示している。

これらのどこか一貫しない展示のスペースから右手の通路へ入っていくと、さらに多くの中国美術、中国工芸といいうものが展示され、前代の籠もいる。同じフロアにはテント村よりはるかに本格的な建物となった天龍雑貨店、明家成薬という薬店がある。雑貨店には中国衣料や中国製傘、ランタン、花火などが売られている。足元には白糖や麵粉とかかれた大きな布袋、香港と名のついた木箱の中は茶らしい。薬店には店主と薬瓶、順番を待つ人々、醤油はこれらのなかに見つけられないが、食品が輸入されていたことは確かである。中国人は現地の人々から文化的影響を受けていたと思われるが、同時に中国伝統の文化も保持していた。集団としてのまとまり役を果たしたと思われる中華公所が、一つのコーナーを作っている。社会に受け入れられるにせよ、拒否されるにせよ、中華公所は中国人の窓口であったと思われる。この世界で生きていく拠り所を中華公所は与えていたのではないか。

ベンディゴにはもう一つ中国人が心の拠り所とした寺院がある。「Chinese Joss House」と呼ばれる関帝廟で、オーストラリアの人々はそのように呼んだ。Jossとは、ポルトガル語のDios-Deus（ラテン語）を意味し [19, p.9]、

神のいます寺院の意味になる。ベンディゴにはこのJoss Houseが1棟残っており、ナショナル・トラストの管理下にある。ゴールド・ラッシュ当時は4棟あったという。寺院は助け手がなく、不安な日々を送っていたオーストラリアにおける中国人の生活の拠り所であった。「Chinese Joss House」は、バララットのキャンプ村の関帝廟と基本的に同じである。中央寺院の向かって左側に世話人の建物、右側に祖先祭祀の建物の3区分からなっている。

中国人の生活の記述についてはこれらのテーマ・パークや博物館によるもののほか、Guildford（ギルフォード）の中国人村について次のような説明がある。「ギルフォードの中国人大キャンプは狭い通路が並んでおり、最盛期には恒久的な劇場、サーカス興行がおこなわれ、あらゆる通りに寺があった。レストラン、茶店、博打場、靴修理人の店、仕立屋、文字・美術の店、書士や翻訳家の店、医師、など広東にある全てのものがあった。」 [19, p.7~8]

1861年にはギルフォードとベンディゴを結ぶCobb & Co.（馬車便会社）が、大型四輪馬車を走らせ、中国人も利用した。馬車はメルボルンの港へ中国人を運び、かなりの数の中国人が契約を終えて、いくらかの貯金をくずの金に変え、植民地を去った。

ベンディゴでは、1860年から町にガス・ライトがとまり、1862年にはメルボルンと鉄道で結ばれ、1877年には貯水池が出来、1892年には電気が通るようになった。現在、46,000人の人々が暮らしている。

3) ケアンズ

Q.L.Dは、「中国人移民法」が成立するのに先立ち1859年N.S.Wから分離している。南と異なる産業・経済は有色人種の労働力を必要としたので、この時期に分離する必要があったという。

有色人の労働力は次のように入っていた。

～1861年～メラネシア人

ケアンズ近海はなまこが生息していた。1803年にはM.フリンダースの調査船がなまこを発見し、なまこ漁が盛んになった。なまこをさばき、燻製にする作業は、アボリジニ、トレス海峡の人々によって行なわれ、東南アジア、中国に売られた。1858年にはグリーン島に工場も作られ、中国・香港やN.S.Wに売られた。

オーストラリア北部では、さとうきびの農園が1860年代から確立し始める。メラネシアの諸島の島民が労働力として受け入れられ、彼らは森林を伐採し、さとうきびを植え、雑草を刈り、収穫し、圧搾し、砂糖を精製した。40年以上の間に6万人の人々がその仕事に従事したといわれ、年季労働者として働き、期限が切れると島へ帰っていった。彼らは厳格かつ過酷な規律のもとに働いたといわれるが、1890年までに11,000人のメラネシア人が入っている。

1873年から—中国人

ケアンズはオーストラリア北部Q.L.D州の観光都市で、東岸に沿って世界遺産のグレート・バリアリーフ、背後には人間の手の入っていないこれも世界遺産の熱帯雨林が広がっている。このケアンズ北方300kmのパーマー・リバーで1873年、金が発見され、ゴールド・ラッシュが起こった。多くの人々が来豪するなかに中国人もいた。

中国人は、Q.L.Dのゴールド・ラッシュの時、10,000人程が金鉱地へ入ったという[5、p96]。Cairns Postの100周年を記念する「Passages of time Vol2」によるとPalmerの採金地とクック・タウンには、一時中国人が17,000人いたと述べる[31、p.34]。Cathie Mayは、ケアンズの近くの金鉱へ入った中国人の事情を次

のように説明する。「中国の仲介人は、パーマー・リバーは金が無尽蔵で自由に採掘できると説明した。中国人は金採掘について何の予備知識もなく、敵対心ととげとげしい環境の中で金を発見することの難しさも知らないで、Q.L.Dにやって来た。結果として不十分な資源下の競争で、貧しさと犯罪に陥ることになった。食べ物もなく、草を食べるほどで、移民機関に借金を重ねることとなった。彼らは、ゴールド・フィールドに留まることが出来ず、1877年には集団で脱出した。1876年後半から1877年には新しく発見されたHodgkintonの金鉱へアクセスを容易にするため、ケアンズとポート・ダグラスの港が建設された。ケアンズ、ポート・ダグラス、ハーバートン、アサートン、イニスフェイルの町々の建設は、中国人の金鉱地からの脱出と一致している。」[5、p.7] Mayは、このように説明することで、脱出を図った中国人が、Q.L.D北部の町の建設、そして港の建設に従事したことを暗にほのめかしている。二つの港は、クック・タウンに大変近く、大きな中国人コミュニティを保つリンクのために好都合であった。新しい移民地は、食物の供給を得やすく、金鉱より安全な仕事を求める機会が開かれていた。

1877～1880年の間にポート・ダグラスへのビジネス上の比重が高まり、ヨーロッパの人々は移住した。中国人はケアンズに残り、耕作地を広げ、輸出向けの穀物栽培を始めた。商品作物を育て、商い、交易品を運び分け前をえた。当初、反中国人感情は、根強かったが、彼らが野菜の栽培や漁労に長けていることがわかると、ヨーロッパ人は彼らを受け入れた。彼らは実際に農業に手を下すより、耕地を中国人に貸すことを選んだので、100人の中国人の連盟による大農園が経営された。農業は人手を必要としたため、中国人移民が増え、ケアンズには

1886年には中国人街が生れる [30, p.33]。

中国人街は、繁華なコミュニティで、商人、まかない宿、野菜栽培人がおり、1887年には Joss House もあった。しかしその地域は、ギャンブルの小部屋、アヘンの吸引、飲酒、だらしない女たちの町ということで評判がよくなかった (Cairns Museum 資料)。中国をもっぱら扱う資料はギャンブル、アヘンについてあまり触れていないが、ヨーロッパ人の資料・文献では、中国人の悪評判について必ずこの点に触れている。

この時代 (1886) のケアンズとその地域の中国人の人口は、1,397人で、全人口は4,657人、中国人の割合は30%である。クック (海岸地域) では、中国人は629人、全人口は994人、中国人の比率は63.3%である。ハーバートン (ケアンズ背後の高原) では、中国人は260人、全人口は2,346人、中国人の割合は11.1%である。これらの人々は、金鉱地からやって来た人々が78%を占めていた [5, p.10~11]。

1886年から商品作物としてバナナが始まり、さらにシュガー産業にも参入するようになると中国人の流入は増えた。1901年までに、ケアンズでの中国人は2,078人に達した。しかし1901年から1909年の間にケアンズの中国人人口は、1,450人から450人に減り、逆にアサートン高原の中国人は250人から1,000人に増える [5, p.14]。彼らはアサートン高原に入って土地を開発し、とうもろこしを育てた。

現在ケアンズへの野菜や果物供給地であるこの地は、中国人によって開拓されたといつてよい。第一次世界大戦後、彼らは戦争から帰ったヨーロッパ系の人々にリースされていた土地を渡し、どこかへ消えた。Joss Houseが残され、あばら家のようにになっていた寺に手を加え、ナショナル・トラストが管理して、中国博物館として開館している。

1886から一日本人の来豪

ケアンズ一帯はさとうきび産業が盛んで、広大なプランテーション農業をヨーロッパ人が経営していた。安価な労働力をえるため、外国—南太平洋、中国、日本から労働力を集めた。日本からも出稼ぎ労働者が入った。産業革命期にあった日本では多くの失業者を抱えていたため、日本政府は移民を奨め、同時に外国での労働悪条件を避けるため「移民者保護法」を定めた。「日本からは1892~1898年の間に熊本、和歌山、広島から2,309人がきた。日本人は信頼性、インテリジェンス、独立精神、分別ある行動、技術力が高いこと等が評価され、18ヶ所で働いた。彼らは、木かレンガで出来た家が与えられ、日本食、熱い風呂、年に2着の背広も供給された。日本食のため米、味噌、醤油など用いられた。一日一食は、パンと肉など食した」。(Cairns Museum 資料) 日本人はこれ以前にもQ.L.Dの最北端の木曜島で真珠の採取にあっていた。契約期間は普通3~4年で、終了すると帰った。

三地域における人々の移動の歴史を見ると、オーストラリアの北部と南部では地域ごとの置かれた自然状況・政治状況・経済状況が異なり、ゴールドラッシュの時期が異なり、その地域の人々の交流範囲も異なることがわかる。南の方では、メルボルン、シドニーは発展の経緯が似ている。他方、Q.L.Dは、N.S.Wから1859年に分離独立したが、発展した産業が異なった。もう一つ大きな違いは、北では人々の交流範囲が地理的に近いメラネシアの人々を含み、農業従事者として日本人や中国人が加わっていることである。ゴールド・ラッシュで入った中国人も、オーストラリアに残った人々は農業を生業とするようになる。以上のような違いはオーストラリアの北と南における醤油事情にも差異を生み出しているに違いない。

4. オーストラリアの醤油事情

1) ケアンズの場合

〈スーパー・マーケットの醤油〉

ケアンズが世界最大のさんご礁、熱帯魚が泳ぎまわるグレート・バリアリーフを東側の海に抱えた観光都市であることはすでに触れた。なまこ漁やさとうきび産業そして各種の農産物を産する地域から、海の美しさ、熱帯雨林で人を呼び寄せる観光都市として知られるようになった。町の人口は54,000人である。筆者は2004年8月末から9月初旬まで2週間あまり滞在し、醤油の調査と関連資料探しをした。まず①スーパー・マーケットの訪問、②できる限り多くの人にあい醤油について聞く、③シェフに会い、料理と醤油について聞く、④博物館・図書館、テーマ・パークの類を出来る限り訪問する、という計画を立てた。

スーパー・マーケットでは、ショッピング・センター内のスーパー・マーケット2、街中のスーパー・マーケット3、アジアン・フードの専門店2、を訪問した。スーパーの棚を見ると醤油のラベルこそアメリカと異なるものの、「soy sauce」とかかれた醤油が、いく段にも並んでいる。アジアン・フードの店は別として、一般のスーパーでは品揃えがほとんど同じである。メーカーの異なる、ざっと10種の醤油が売られている。メーカーでは、オーストラリア製-Coles Savings Soy Sauce、Coles Soy Sauce、BI-LO Soy Sauce、Fountain、MasterFoods、中国製-珠江橋牌 PEARL RIVER BRIDGE superior light SOY SAUCE、TAMARI、香港製-李錦記特級鮮味生抽KECAP MANIS中 ABC (アメリカで見た製品と同じ物)、日本-キッコーマン (シンガポール製)、キッコーマンlight、TERIYAKI、などがある。アジアン・フードの店へ行くとアジアからきた製品が多種類並ぶ。タイ、フィリ

ピン、インドネシア、ベトナムからのものもある。醤油のみでなく魚醤が輸入されている。

価格から見るとキッコーマン醤油を頂点として、オーストラリア製がセールで500mg 1ドルで売られている。価格の違いは製品の質の違いとも考えられる。幾社もあるオーストラリア製の「soy sauce」で最も安価なものは、見たところ黒っぽい色をしている。成分を見ると、水、塩、大豆ベース (10%)、水大豆ととうもろこしの蛋白、糖蜜、スパイス、砂糖、food acid、反気泡剤、着色、などで構成されている。同じ商品名でラベルにColes by Lee Kum Kee (李錦記) とある醤油は、香港製で、Coles スーパー・マーケット・オーストラリアのためにビクトリアの東洋商社によって輸入とある。この製品は、自然発酵と銘打っているが、水、塩、大豆 (10%) で、砂糖、小麦粉、イースト粉、香料が使われている。「李錦記」は、オーストラリアのスーパーColesと提携を結び、製品を納めている。また「Fountain」は、オーストラリア製で、自然発酵をうたっているが、自然発酵醤油51%で、砂糖、水、小麦、大豆産品、醸造過程で生れたアルコール2%を含む、とある。

ラベルにはっきり自然発酵と銘打っている中国製の醤油「珠江橋牌」を見てみよう。成分は、自然発酵醤油51% (大豆、小麦、水、塩)、その他に、水、砂糖、自然発酵の段階で生れたアルコール2%含有、とある。この醤油はアメリカ製の醤油に近いかもしれない。この成分表の下にはGuangdong foodstuffs VE(group) corp. (会社名) となっていて、次に住所が記され、中国と記されている。そしてpacked for建華貿易有限公司と記され、オーストラリアのビクトリアでボトル詰されていることが分かる。中国の醤油は、アミノ酸醤油が主流であったが、現在は本格的な本醸造醤油も作られていることが分かる。

オーストラリア製「fountain」は、中国製「珠江橋牌」と成分が同じである。Colesは、香港の醤油メーカー「李錦記」と提携している。オーストラリアの醤油は、中国の醤油と関係がある。いくつかの成分表から、オーストラリアの醤油が、どんな成分でその産地がどこからきたものかが想像できる。また「soy sauce」といいながら、水・塩・大豆ベース10%という内容は、日本人なら驚くところであろう。ゴールド・フィールドで、原料もないまま醤油と似たものを作ったのではないか。

醤油も使われる地域によって甘味の強い味を好む地域、本醸造に手を加えないで醗酵の働きのみを好む地域など様々である。オーストラリアでは、「soy sauce」に砂糖を加えていることから、甘味を好むようである。

〈醤油を使う人々〉

本格的な調査が難しいこともあって、出来る限り多くの人たちに話しを聞くという次のような方法をとった。①直接のインタビュー4名(男性2名、女性2名)、②身近にいる主婦7名(電話によるインタビュー)、③シェフレストランで2名、1時間のインタビュー1名。

直接インタビュー

A氏は32歳、日本で日本語を学んだ。現在広告関係の営業の仕事をしている。「子供の頃、食卓の上にはウスターソースがのっていた。醤油は中華レストランにあった。両親に連れられて旅行に行くと、どんな田舎にも(被調査者の表現)中華レストランがあって、そこで食事をした。日本のレストランには10歳頃(1982年頃)にはじめて行った。現在は、妻が日本人なので、醤油味の日本料理が多い。」

B氏は、43歳。ケアンズで衣料品のチェーン店を営んでおり、ケアンズ出身である。「醬

油は、おばあちゃんも使っていた。ぼくも子供の頃から使っている。」どんな風に使うかとたずねると、「何にでもかける、ステーキにも、野菜にも、ごはんにも」、どんな醤油を使うかとたずねると、「安いのを買ってきてジャブジャブかける。今度いところが結婚してイギリスへ行くけれど、彼女はイギリスへ行っても醤油を使うと思う。」

Cさんは60代の女性で、会計のパートタイム・ジョブをしているが、主婦でもある。「40年前にケアンズにやってきたが、町には中華レストランがあるだけだった。中国料理を食べるうち、中国人と友達になって料理を教えてもらい、醤油もその時知った。その時以来使っている。」

Dさんは、静かにガーデニングを楽しみながら、老後を暮らす主婦である。最近健康診断の結果が思わしくない。医者に食事を考えるようにといわれて、「ご飯に醤油をかけて食べている。」という。台所から持ってきた米と醤油をみると、細長いインディカ米ーオーストラリア産と「珠江橋牌」である。これは良い物かとたずねるので、「よいと思います」と答えた。51%本醸造のこの醤油は、血圧の高いこの女性にとって日本製の塩けの強い醤油よりよいかもしれないと考えた。

電話によるインタビュー

質問は①いつ醤油を使い始めたか。②何の料理に使っているか。③どんなブランドの醤油を使っているか。その理由は?④醤油はオーストラリアの調味料の一部になっているか。⑤醤油を使うことで料理は美味しくなるか。であった。対象者は、ケアンズの私立小学校へ通う学童の母親で、年齢層は30代~40代が多いとおもわれる。余裕のある階層であるかもしれない。①については、料理を始めた時、結婚した時、オ

ーストラリアにやってきた時、使い始めている。②については、アジア料理、中華料理、チャーハン、バーベキューである。③はキッコーマンがほとんどを占めているが、ABCをあげた人もいる。④⑤については、「醤油を使うことで料理の味がよくなり、醤油はオーストラリアに定着している」、と考えている。ちなみに彼女たちの出身は、オーストラリア人2、イギリス人2、アイリッシュ2、中国人1、フィリピン1であった。オーストラリア人とは、4～5世代前の移住者をいう。

〈シェフ〉

最後に料理人に聞いてみた。レストランに行って料理が終わる頃にシェフにきてもらい、簡単に話を聞いた。ステーキ・ハウスのシェフは、レストランでは醤油を使っていなかった。塩と胡椒で、大変単純な味であった。しかし醤油については「オーストラリアの醤油は美味しくない。キッコーマンは美味しい。ずっと前から中国レストランや中国人の友達から醤油については教えてもらった。家では家内がラム・チョップに醤油をたらしてから、とか、えびやかき、ムール貝にたれとして使っている。醤油はキッコーマンを使っている」という。もう一人のシェフは、いろいろな種類の料理を出すレストランであったが、彼はインドネシア製の甘く、深みのあるソースを好んでいた。しかし輸入されなくなり、たのんだチキンの料理はマレー製という甘いソースが絡めてあった。その味は複雑な中に洗練された味付けを好む日本人には物足りないだろう。

ケアンズの最高級レストランで多国籍料理をつくるシェフは香港で生まれた英国人で、香港、マレーシア、中近東、韓国、モルジブのレストランで修行をした。ケアンズは観光地であり、南より多様な人種で構成されており、観光客も

多い。その点で多様な文化の生れ、その最もケアンズらしい料理は多国籍料理であるかもしれない。シェフの多様な経験が、各国の食文化のよさを生かしたアジア・フュージョンの料理を生み出し、人々の人気を呼んでいる。多国籍料理のメニューについて、「マグロ、ほうれん草・ピーマンを使い、中は半分たたきの、みりん、ライト・ソイ・ソースを使った春巻。テリヤキ・ソースを使ったビーフ・フィレとナスの天ぷらそしてほうれん草をパンに何段にもはさんだサンドウィッチ様の料理。盛り付けでは、一皿のうえに中国のもの、日本のもの、を並べてディッピング・ソースを小皿に入れる。マレーシア、フィリピン、中国の料理を一皿に組み合わせる。インドネシアの醗酵していない甘いソイ・ソースを使い、ごはんとの組み合わせにする。」等の、料理と「soy sauce」についての料理の説明がある。最後にこのシェフはソースについて次のようにまとめた。「15～20年前は醤油を知っているシェフは少なかった。マリネにする場合も、セサミ・オイル、みりん、酒、醤油に漬けておくとつかりすぎる。キッコーマンは伝統があるので、製品にこだわりがあり、味を守っている。ソースで何を使うかは、食材に影響される。多国籍料理は、食材をどのソースと組み合わせで調理し、新しい料理を生み出すかを考える。西欧では塩、胡椒が味付けのベイスックとなっているが、ストックから作ったコンソメにソイ・ソースを入れることで、味がまろやかになる。」

このように様々な国の食材、調味料を使い、食材を生かした味を組み合わせ、新しい味を生み出すシェフが生れるのも、多様な人種の共存する観光地ケアンズの地のなせることといえる。そしてもう一方の極には、オーストラリアの地の食材を用いたオーストラリア料理が生れつつある。ワニやエミュー、バッファローの肉

を使った料理が、果物とアボリジニが用いた香辛料を組み合わせたソースで供されている。

醤油は中国人を通してケアンズに入っていた。ケアンズの一般社会では醤油が普及している。しかし日常の家庭料理以外の、より洗練された料理を目指す、食材に対するセンスと技の必要な料理人は、トップレベルの人々以外、醤油の十分な利用法を獲得しているとはいえない。

2) メルボルン・シドニーの場合

メルボルン・シドニーでは、中華街、スーパー・マーケットに見るべきものがある。直接にオーストラリア人にインタビューは出来なかったが、メルボルンで旅行社（日本人）の人たちの知る範囲で、聞いてみると今はみんな醤油を使っていると思う、という。一般の人々は醤油を使っていると思われる。

スーパー・マーケットでは、町の中心地と中国人の多い地域では品揃えが異なる。シドニーでは中心地のスーパー・マーケットでは、調味料の棚は、日本のキッコーマンのみならず、オーストラリアの「soy sauce」も、中国の醤油も並んでいる。しかし棚のスペースが小さいように思える。ところが、中国人の多く住むという中心部から電車で20分ほどの地域のスーパーへ行くと、オーストラリア製、中国製、インドネシア製、香港製、日本のキッコーマンなど、多様な品揃えの棚がスペースも広く並んでいる。

シドニーの中華街を見て歩いていると、2軒のスーパー・マーケットに出会った。スーパーというより、grocery store（食料品店）という規模の店だが、肉が大きなスペースを取る店内には、壁に沿って多様な調味料—醤油、魚醤、中国の様々な調味料、が置かれ、大瓶が並んでいる。中華料理店から買い求めにくるのかもしれない。店内は殆どが東洋系の人々である。

朝永宗彦による『オーストラリアの観光と食

文化』では、ビクトリア（メルボルンおよびその周辺）におけるエスニックな外食産業が、エスニック集団の分布とどれほど一致しているか・分離しているか、の角度からエスニック料理の社会での需要の特徴を洗い出している。エスニック料理としてベトナム、グreek、チャイニーズ、イタリアン、ジャパニーズ、インディアン、フレンチ、タイが取り上げられており、これらの国々の料理を提供するレストランが、エスニック・コミュニティにどのくらいあり、そこから離れたところにどのくらいあるかを一定の算定法で計算している。エスニック集団に多い場合は、移民者が自国の料理を日常の食事として食べるために利用していることを示し、エスニック集団から離れたところにある場合は、コマーシャルすなわちホスト社会（オーストラリアの社会）や観光客、コミュニティ以外の移民などの利用が多いことを想定する。その結果、ベトナム、グreekはコミュニティに近いことを示し、チャイニーズはコミュニティとコマーシャルの間、イタリアンはコマーシャルに近い。以上4つは移民者の多いエスニック集団である。日本、インディアンはコマーシャル、フレンチ、タイは典型的なコマーシャルである。コマーシャルであることは、ホスト国の人々に対する影響が強いことを示している。日本料理は、日本とつけると客が来ると考え、中国人や韓国人が日本料理の店を開くという話しを聞く。その結果かどうか、日本食と思って店にはいるとまるっきり日本食とは違っているという。移民の少ない中での珍現象といえる。しかし中国料理レストランはエスニック・コミュニティに多くあり同時にコマーシャルでもあるが、コミュニティにより多い。醤油という視点から考えると、日本食によるより、中華料理のほうの影響力を発揮していることは考えやすい。

醤油は米国でそうであったように、中華料理とともに入ってきたと思われる。日本料理とともに入ってきたのではない。日本人から見ると変わった醤油の普及がオーストラリアで起こっている。醤油に限らず、グローバルゼーションはひとつだけのやり方で浸透していくのではない。オーストラリアの場合、醤油のグローバルゼーションは、食を中心にヨーロッパ系の人々と中国人がどのように交流をしていったかの分析の視点を与えるものである。この交流がアメリカとオーストラリアでは異なっていたと思われる。

むすび

ゴールド・ラッシュはオーストラリアに醤油をもたらした

アメリカでは、現代の最先端の経済の枠組みの中で、高度な文明、多様な文化、それを受けて多様な市民社会に属する人々の醤油事情が調査された。現代の消費生活はあらゆるマーケティングの技法のもとに、激しい競争下で繰り広げられるものであった。その結果、日本の伝統ある高い品質の商品が受け入れられたが、競合した醤油は、アミノ酸醤油と51%本醸造の醤油であった。それらはアメリカで生産されていたが、アメリカに渡った中国人が、もたらしたものに違いない。アメリカの醤油のグローバル化についてまとめた時点では、中国人がどのように醤油をもたらしたかについて、研究なく終わった。オーストラリアのグローバル化の調査は、その解答を与えてくれるようだ。

オーストラリアにおける醤油のグローバル化は、欧米と中国の人々の世界的移動、反目と交流という、アメリカにおける同じような経緯を経ているといえる。中国にもどった人々がおろ、移民の形で現地に残った人々がいた。残った人々は中華街をつくり、各地に中華レストラ

ンを経営して、醤油が社会に浸透していく役割を果たした。

ゴールド・ラッシュという時代は、アメリカもオーストラリアも近い時期に始まっている。その時期にはアメリカはすでに独立を果たし、国民国家形成の途上であったのに対し、オーストラリアはイギリスの植民地で、主権をもたなかった。国民国家としての体裁を整える前、総督による統治が行われ、法的な制度は議院で討議がなされ、最終的にはイギリス本国の議会で承認を受けた。経済もゴールド・ラッシュで得られた金は、N.S.W銀行などを經由して最終的にはイギリスの中央銀行へ持ち込まれた。この金がイギリスに金本位制をもたらし、経済強国としていくことは前に述べた。

オーストラリアはこの時代に産業の発展を経験する。オーストラリアの可能性を見て取るや、イギリス本国、メルボルンの人々、そして独立心旺盛なベンディゴやバララットの人々が、株式を保有することで会社運営に参加し、破産の危機も幸運も経験した。資本が入り込み、それまで牧羊産業で富裕層が財と豊かな生活を享受していたが、はるかに多くの人々に富が行き渡り、持ち家が増え、中産階層を形成することになった。資本主義がよりオーストラリアへ浸透し、定着していった。資本主義の国イギリスの植民地であり、移民によって形成された国であることを考えると当然であるが。

ゴールド・ラッシュの光の部分、多くはイギリスやヨーロッパの人々にあつた。中国へ戻った中国人にも幾ばくかの富の分け前があつたと思われる。ここで移民について考えると、移民は当然のことながら初期はイギリス・アイリッシュ・スコティッシュが多く、ゴールド・ラッシュが訪れた時、ヨーロッパ人がそれに加わつた。人の移動が、文化の伝播を促すことを、多くの事例からわれわれは知っているが、少し

遅れて中国人が加わった。この中国人の採金は、人種的・文化的な違い、経済的な利害からヨーロッパの人々から手ひどい反発を食らった。しかし1860年に施行された「中国人移民制限法」にもかかわらず、何らかの理由でオーストラリアに残る中国人もいたのである。彼らには、市民権はなかった。法律的な制限を受け、得意な農地を耕す技術を生かすため土地を買うこともならなかった。それにもかかわらず、メルボルンやシドニーには中国人街が作られ、ベンディゴには中国人文化センターが後にできるように、中国人とベンディゴの人々の間に交流があった。中国人の生活があったというべきであろう。中国人はマイノリティというには白人のような権利が認められていなく、自分の国ではないところで母屋を借りながら暮らす、という感じであったのだろう。

N.S.Wのシドニーとビクトリアのメルボルンでは町が大きいこともあり、中華街とオーストラリアの人々の相互影響は、際立って大きいというほどではなかったかもしれない。しかしQ.L.Dのケアンズの町は南部の事情と異なる。インタビューの中からはわかるようにケアンズの人々の醤油についての知識は直接中国人から得ている場合が多い。醤油は、一般社会により受け入れられ、用いられている。そして洗練された多国籍料理に他国の料理と融合する形で醤油が生かされていることは、多様な観光の町で醤油が用いられることの一つの象徴である。オーストラリアの人々が最も親しんでいるステーキの店で醤油が使われていないのはなぜか。ステーキのシェフに醤油が使われないのはなぜか。醤油の入り方がアメリカとは違っていたというしかない。

また移民の国アメリカでは、アジア系の人々がカリフォルニアを中心に居住しており、中華料理のレストランのみでなく、アジア系の市民

が家庭で醤油を使っていた。白豪主義を歩んだオーストラリアでは、イギリスからの独立以来1960年代に至るまで、文化の混交は、あるとすればヨーロッパ文化内で主にあったのだろう。現在は一般家庭で振舞われる「Teriyaki」ソースの肉料理は、肉にソースがマッチして大変おいしい。

オーストラリアで販売されている醤油は、3つのランクに分かれる。

1 オーストラリア製、中国製—soy bean base 10%

2 オーストラリア製、中国製—醸造 51%

3 日本製、中国製「TAMARI」—100%本醸造

である。2の51%本醸造は、日本の醤油がオーストラリアに入るようになって取り入れられたのではないか。そう考えて時代順に並べると、1が最も古く、3の本醸造が入り、2が最後に生れた。醤油の多様化が起こっているのである。

中国人が中華街で、あるいは町で中華料理のレストランを経営する時、彼らは調味料として醤油を用いたに違いない。その醤油は香港、広東の製法と味に基づくもので、オーストラリアにはこの味が広まったと考えられる。中国人が、オーストラリアで醤油を作ったことも考えられる。現在の醤油の取引も香港そして広東の醤油醸造業者との間でである。オーストラリアへ行った中国人のふるさとである。

参考文献

- [1] Ashton, Paul and Duncan Waterman 『SYDNEY takes SHAPE a history in maps』
- [2] Bate, Weston: 『LUCKY CITY the First Generation at Ballarat:1851-1901』 Merborne University Press, 1 ed., 1978, 2,3,4,edt.,1979,1989,2003
- [3] Bate, Weston 『VICTORIAN GOLD RUSHES』 Sovereign Hill Museum Association, 1edt.,1988,by Macphee Gible, 2edt.,1999
- [4] Couchman, Sophia & Others 『AFTER the RUSH Regulation, Participation, and Chinese Communities in Australia 1860-1940』 An otherland book HEMA Maps, 2004
- [5] Cathie May 『TOP SAWYERS:the Chinese in Cairns 1870 to 1920』 Studies in North Queensland History No.6 1996
- [6] Reid, John & John Chrisholom Photography:Max Harris 『BALLARAT GOLDEN CITY』 Joval,1edt.,1989, 2edt.,2002
- [7] Robert, J.A.G 『CHINA TO CHINATOWN Chinese Food in the West』 Reaction Books,2002
- [8] Talbot, Diann, Dianne Talbot 『The BUCKLAND VALLY GOLDFIELD』
- [9] 朝永宗彦 『オーストラリアの観光と食文化』 学文社 2003
- [10] 小山修三編 『世界の食文化⑦オーストラリア・ニュージーランド』 農文協 2004
- [11] 大石信行 『イエローオーストラリア アジア化に揺れる豪州』 明石書店 2003
- [12] 梶田孝道 小倉充夫編 『グローバル化と社会変動』 東京大学出版会 2002
- [13] 田口富久治 鈴木一人 『グローバリゼーションと国民国家』 青木書店 1997
- [14] 藤川隆男編 『オーストラリアの歴史 多文化社会の歴史の可能性を探る』 有斐閣アルマ 2004
- [15] 藤川隆男 『オーストラリア歴史の旅』 朝日選書 1edt.,1990, 4edt.,1995
- [16] 前川啓治 『グローカリゼーションの人類学 国際文化・開発・移民』 新曜社 2004
- [17] A.D.キング編 山中弘 安藤充 保呂篤彦訳 『文化とグローバル化 Culture, Globalization, and the World-system』 玉川大学出版部 1999

資料

- [18] Brian Barrow 「CHINA & the LAW」 the Golden Dragon Museum
- [19] the National Trust and Bendigo 「BENDIGO and CHINESE JOSS HOUSE」
- [20] 「CHINESE COMMUNITY in BENDIGO -a unique history」 Golden Dragon Museum
- [21] 「HYDE PARK BARRAKS MUSEUM Guide Book」 Historic Houses Trust
- [22] 「BALLARAT CHINESE HERITAGE TRAIL」 Ballarat Eurika
- [23] 「BLOOD on the SOUTHERN CROSS, the story of Eurika」 Sovereign Hill Ballarat
- [24] 「Historic Guide to Bendigo」 edited by Jim Evan Bendigo Historic Society Inc.2003
- [25] 「CHINESE PROCESSION」 Bendigo at Easter by Golden Dragon Museum
- [26] 「SHOWING FACE Chinese Identity

- in Regional Victoria from the 1850 to Federation] Golden Dragon Museum
- [27] 「SOVEREIGN HILL」 Ballarat Victoria Australia
- [28] 「TRADE WALL」 by Museum of Sydney Historic Houses Trust of N.S.W
- [29] 「Ballarat Chinese Heritage Trail」 Ballarat Eureka
- [30] 「100th Anniversary of Cairns Post Passages of the time」 Cairns Post 2004
- [31] 「100th Anniversary of Cairns Post 2 Passages of the time」 Cairns Post 2004
- [32] 「100th Anniversary of Cairns Post Passages of the time」 Cairns Post 2004
- [33] 「The Traveller's Guide to Sovereign Hill」 The Sovereign Hill Museum Association 1999